

牛の卵巢と大網

家畜試九州・鹿児島市食肉センター出題 第24回獣医病理学研修会標本No.418



動物：牛，黒毛和種，雌，約20歳，昭和58年12月2日19：00
切迫屠殺，3日採材。

臨床：昭和38年12月生。昭和58年4月7日に最後の分娩
(17産目)，その後1回発情がきたが老齢のため種付けせ
ず。11月29日起立不能，30日初診，ぶどう糖と強肝剤を
投与。12月2日屠場出荷。

肉眼所見：全身の脂肪は黄色を呈していた。腹腔の漿膜，
大網，脾の被膜などには，無色透明の液を充満した直径
1ないし2cm大の嚢胞の密在した腫瘤が約2ないし3cm
の厚さで表面を被うように認められた。肝には肝姪が寄
生し，脾の被膜には前記したように腫瘤が付着し，腎に
は直径0.5ないし1cmの黒色の結石状物が散見，心の脂
肪は黄色を呈していた。肺には著変はなかったが，肺門
リンパ節は5×5×20cm程に腫大し，腹腔内にみられた
のと同様な腫瘤の転移がみられた。腸間膜の脂肪は膠様
変性に陥っていたが，腸間膜や腸間膜リンパ節には肉眼
的には腫瘤の転移はなかった。卵巢は一側が鶏卵大，他
側はテニスボール大となり，卵胞嚢腫となっていた。

病理組織学的所見：腫瘤は一層の柱状ないし立方上皮の
配列した様々な大きさの嚢胞で構成されていた。嚢胞間
には薄い結合織があり，まれに乳頭状増殖も観察された。
核は大きく円ないし楕円形であり，核分裂像はみられな
かった。細胞質は乏しく，細胞の遊離縁には線毛をもっ

ているものもあった(写真1, HE, ×250)。線毛細胞はエ
オジンに濃染し，通常は非線毛細胞よりも丈が高く腔内
に突出していた。嚢胞腔内には，エオジン，ムチカルミ
ン，PASでは染まらない液が貯留していた。肉眼的に
卵胞嚢腫とみられた嚢胞も大網の腫瘤でみられたものと
同様な線毛上皮と非線毛上皮で構成されており，腫瘍性
嚢胞とみなされた。肺門リンパ節や腹腔リンパ節には腫
瘍の転移がみられた。

電顕的所見：電顕的にも腫瘤は線毛細胞と非線毛細胞か
ら成っていた。線毛細胞は，遊離縁に線毛と微絨毛をも
っていた(写真2, ×4,000)。核は大きく楕円形であり，細
胞質はリボゾームや細線維が豊富であり暗調であった。
細線維は集合し線維束を形成しているものもあった。非
線毛細胞のあるものは遊離縁に微絨毛をもっていた。核
は円ないし楕円形であり，切れ込みがしばしばみられた。
細胞質は細線維に富んでいたが線維束の形成はみられな
かった。中等数のミトコンドリアや少数の粗面小胞体が
観察され，一般に明調であった。線毛細胞と非線毛細胞
はデスモゾームで連結されていた。上皮下には薄い基底
膜があり，その周囲を線維芽細胞が取り巻いていた。

病理組織学的診断：線毛細胞を特徴とする卵巢原発の嚢
胞状腺癌。